

人間人間
Ituma Hitoma

返信



返信する度に変心して変針して、そして変身に行き着く。

僕の行っていることを簡素に語るなら、そういった言葉遊びめいたものに行き着く。

僕はメールを彼女に送信し、時には返信する。

そのメールの文面を綴り、思いを巡らせることで僕の心は千変万化となる。

変心は、僕の生活における行動の指針を変針させてしまい。

そして、自らの変身を願うようにさえなる。

僕は訳あって一度も部屋から出たことはないのだが、メールによって外に繋がっている。

メールの送受信は僕にとって唯一、生産的と呼ぶのに値する行為だ。直接会ったこともない彼女に対して、僕は薄暗い部屋にいる本来の自分を想像させることのない、明るい話題を振りまく。

電子メールの中で、僕は彼女の快活な文章に応える好青年となっていた。だけど実際は薄暗い部屋の中に籠もりきって、常に十五分は標準時刻より先走る時計の秒針の音に浸っているのが僕の毎日だった。秒針は途切れず、僕にその針で触れてくる。大変耳障りだが、僕にはそれさえもどうすることも出来なかった。

紫色のカーテンは常に閉じきって、本来の色が判別出来ないほど闇に染まっている。埃も部屋中に舞い散っていきそうだが、これは幸いなのか暗色の中で見分ける術はない。

掃除もほとんど行っていない上に物の整頓も疎かで、室内は汚れ放題だ。だが不思議と、人間以外の生物の気配はなかった。閉じられた部屋には虫も入り込めないのだろうか。

この部屋の中に引き籠もっていても生活に困ることはなかったが、人生には少々困っているようだった。

僕は外に出たことがないから分からないが、このような生活はおおよそ、健康的とは言い難いだろう。暗闇の中でジツと、何かを堪え忍ぶようにして

時間を浪費するという生活スタイルを肯定する者も、そうはいないのだろう。恐らく彼女も僕の生活を知れば、似た感想を抱くはずだ。

今の僕が恐れるものはそれだけだった。彼女との繋がりを失いたくない、というただ一点。自分の現状を省みるに、失う覚悟はあってもそれは大変辛い。

僕の生活の関心は彼女とのメールだけに注がれていると言っても、言い過ぎじゃなかった。

僕は彼女に恋するのではなく、愛情を抱いていた。顔も声も、肉体的な要素とはおおよそ無縁で、そこに触れることさえ生涯叶わない、電波の中の彼女に対して、僕は愛を覚えていた。

愛。文字にして外の空気に触れれば、一瞬にして酸化を引き起こして味気なくなるもの。

それを内側に蓄えながら、切れ切れに、細々と彼女に送り続ける自分がいる。

こんな僕はおかしいだろうか。変わりもの、と呼ばれても反論出来ないのだろうか。

彼女のメールが、開け放した窓からそっと入り込む風のように訪れたときだけ、僕はパツと明るさを取り戻す。僕の日常がほんの少しだけ騒々しく、また未来へ向けて及び腰で前進した瞬間に思えてならない。それぐらい、僕の中で彼女からのメールは重要となっていた。

彼女からのメッセージが、僕の部屋で秒針以外の音を生み出す。カチカチ、と文面作成の為にボタンを早急に押す音もまた、怠慢だった心臓や脈拍が一気に活動を再開したようにも思えた。僕の生殺与奪は彼女に握られている。もし彼女に愛想を尽かされたら、僕は部屋の中でひっそりと息絶えるのを待つだけとなるだろう。それどころか、外界が減ぶことになる。

僕の想像する外の世界には、澄み渡る百花繚乱の景色に一人佇む彼女が、携帯電話を握っている姿だけが映っていた。その風景から彼女が失われることで、楽園は暗転する。

彼女へのメールを送信し終えてから、僕はいつも身を投げ出して床に寝転び、天井と区別のつかない暗闇を見つめ続ける。そして、彼女からの返信が届きますようにと祈るのだ。

実は今も十五分前ほどに、彼女へのメールを送信し終えていた。僕はずっと深淵の中に潜り続けて息苦しく生きていられるけれど、彼女とのやり取りはそ

の中で息継ぎの役割を果たしていた。彼女は僕の空気であり、水である。生きる糧そのものだった。どうしてそこまで彼女に惹かれてしまったのか、自分でも納得しきれない部分があるほどだった。

彼女からの返信メールが届く。僕はまた、夜を浮上していく。すうっと地底湖の水面から顔を覗かせるようにして、ゆっくりと、息苦しさを解き放つ。矛盾した物言いだ、それは解放感の摂取だ。だけどそれも束の間、表に顔を出した僕の体内は二酸化炭素ではなく、彼女という酸素で埋め尽くされる。先程までの息苦しさと似て非なるそれは甘美の含まれた、満足感に近い圧迫だった。僕はそれを限界まで取り込んだことを確認してから、また夜に沈んでいく。

与えられた真珠のような宝物を、そっと胸に秘めて。

……だけど。

宝である彼女からの新規メールを開封する。

そして表記された文章に目を見張る。

今回のメールは、今までと趣が異なっていた。

僕は戸惑いを隠せず、文面を追う目にノイズが走るようだった。

悪い知らせ、ではないようだけれど。

彼女からのメールには、登録されていない携帯電話の番号が記載されていた。『よろしければ』という短い言葉を、その前に添えて。

浅学なのでロクに本を読んだこともないのだが、ある小説の帯を見かけたときに感銘を受けたことがある。そこには『愛は祈りだ』と書かれていた。その言葉は今も、僕の胸に強く刻まれている。

だとするならば、僕の行為もまた愛であり、祈りであるように思えてならない。僕がメールを送信するとき、彼女に届けと痛切に思うことは、心の中の神に祈ることに酷似していた。

僕の中で彼女は、手の届かない存在という点では神に近い立場だった。

そんな彼女とメールをやり取りする仲になったのは、半年前だ。最初、彼女は僕に間違えてメールを送ってきた。僕とは一切の面識がない、というかそもそも面識のある相手がいらないのだから、偶然以外で外の誰かと知り合う方法はなかった。偶然は時に、心に運命をもたらす。

或いは、それは決められていたはずの生涯に発生する不確定要素、バグと呼んで差し支えない物なのかも知れない。

送信者を間違えたと知った彼女は、まず僕に謝ってきた。違うと分かったのなら、後は無視を決め込んで忘れてしまえばいいのに、彼女にそういった不誠実さはないようだった。

僕のような顔も知らない存在に対しては過剰とも言える謝罪文を返信されて、良心というものが疼かない方がどうかしている。僕は『いえいえお気になさらず』といった旨の文章を送信して、これでお互いに『ああ良かった、他人に迷惑かけなくて』と納得して終わって欲しいと願った。最初は、彼女に対して思うところなど何もなかったのだから、今思えば不思議だ。

僕の変心は異常だと評しても、過言じゃないぐらいだ。

半年後はさておき、その時の僕は返信を逆に期待せず、また薄暗い天井や壁と向き合っていた。だけど数分後、彼女のシンプルなメールアドレスが再び液晶に映ることとなり、更には『メル友ってやつになってみませんか』という意思の記載されたメールが届いたことで、僕の心中は氷の下に潜むような平坦さをかき乱された。

続きは本誌で！